

もの思いに更ける秋の季節 峠に昔を偲ぶ

ずいぶんと秋も深まったものだ。暑い暑いと連発していたのも、ついこの間であったように思うのだが、人の心は移り気である。これから寒い季節に向かうと思うと、暑かった夏がちよっぴり恋しくなるのである。そういうえば今頃になると、観光地で仕事をしていた頃を思い出す。数十年前も前だったら四〜五泊の仕事はざらだった。一日に走る距離も二〇〇キロ前後だった。秋十月ともなれば日暮れが早い。真っ暗やみにホテルに到着などということは何もなかった様に思うが、今はそれが当た

り前と聞く。

異郷の地 一夜の宿の 夢枕

明日の旅路に 思い果てなし

詠み人 紫陽花

その頃の道路は未舗装のところが多く、高速道路なんて夢の又夢で、国道をひたすら走り、美幌峠も阿寒の横断道路、摩周観光道路、そして道央の中山峠も礼文華峠も未舗装だった。どの峠道も細くカーブがやたらと多く、とてもスピードを出して走るなんて事は出来る筈もなく、ゆ

っくりと適度にブレーキを踏みつつ峠を下りていた。今でもドライバーの言葉を思い出す。「平坦な道や、上りの坂道はスピードを多少出しても、下る時は絶対にスピードは出さない」といった人がいた。私も今よく運転するが、この言葉は肝に銘じている。ご存じの方も多かろうが、かつて峠道のあちこちで、崖下に車が転落しているのを見かけたものだ。今だからこそ判ることだが、当時の車の性能は決して良くはなかった。余りスピードを出し過ぎてブレーキの使い過ぎ、仕舞いにはドラム

小栗
text : Oguri Mikiko
美喜子

が焼けてブレーキ操作しても全く効かなくなってしまうのだ。未熟な運転が得てして事故に繋がるわけで、今でも当時のドライバーの一言が教訓となっている。当たり前なのだが、下りはスピードを控えるようにしている。何せ仕事をしていた車は大型である。細いカーブの多い道で、対向車との交差は難儀の連続だった。阿寒の横断道路でのことである。昭和三十年代の中頃、道路の改良工事が少しづつ進められてはいたようだが、それまでほとんど狭い道、そこで一計を案じてか、ガイドの説明は控えること、ラジオは掛けない、お客様にお休み戴くなどとした。決してサボっていたわけではありません。

なぜかと言えば、カーブに差しかかる対向してくる車のクラクションを聞き、こちらもクラクションを鳴らして、存在を知らせるといふ工夫をしていた。擦れ違うことになる、タイヤは辛うじて崖の上、車体の前部は崖からはみ出している有様。いまま思出し出しても恐い峠でした。でも考えてみると当時のドライバーは、とても優秀な技術を持っていた

と思われる。何度も横断道路を行き来したが、当時、トラブった事は一度もない。この峠を昔「四七七曲がり」と呼んでいたが、あの大きな車体で二〇数キロの細い峠道をよくもまあ、スイスイとハンドルを回して上り下りしたものである。勿論、オイル砂利道。最近も何度か通っているが、懐かしい旧道を目にしているを思い出している。

横断道路の途中に、清水の沢というのがある。当時は車を寄せてはあの沢から流れ出る清水を、観光客に飲ませて上げたものである。ずいぶん、悠長な旅をしていた事がお判りでしょう。

こんなセリフを言って飲ませて差し上げた。「一口飲んで十年、二口飲んで二十年、三口飲みますと死ぬまで生きる長寿の水」と。でも情緒がありましたね、当時の旅は今ほ行き交う車両が俄然多く、清水の沢で車を停車する事さえ叶わず、その上、沢の水？ エキノコックスという寄生虫の心配があつて絶対禁止と言われる時代、やはり、今は情報が多すぎてつまらないの一言です。そしておまけにそうやたらと停



車できないのも、最近の旅行は急ぎ過ぎ、走り過ぎ、安過ぎ、酷過ぎます。

これでは北海道の観光は台無しです。苦言を申したいのは山々ですが、ここまで来ると言っても無駄と諦めて、所詮は時代の流れと見て見ぬ振りをしている次第だ。

昔は良かったなどと言いますと、鶴田浩二ではありませんが、「古い人間とお思いでしょうが・・・」の部類に、私も入ってしまったのかとはたと考えてしまう。

秋の紅葉はすでに始まっています。この秋こそ是非、どこかへ出かけ下さい。